

### 『鉄輪』について

鈴木, 靖

---

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute  
of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 / NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies

(巻 / Volume)

48

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

17

(発行年 / Year)

2024-03-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030842>

# 『鉄輪』について

鈴木 靖

愛する男が心変わりした時、恨むべきは男か、それとも男の心を奪った女か。能にはそれぞれのドラマがある。

『源氏物語』に取材した『葵上』では、六条御息所は光源氏の正妻である葵上を恨み、生き霊となってとり殺そうとする。『平家物語』剣巻に取材した『鉄輪』では、女は自分を捨てて後妻を娶った男を恨み、鬼となって恨みを晴らそうとする。

六条御息所が光源氏ではなく、葵上を取り殺そうとしたのは、王朝的な恋愛のルールに従ったに過ぎない。王朝時代においては、男女の心を縛る倫理的規範はなく、恋愛はまさに奪い合いであった。奪われた者は、奪った者を恨む。まして六条御息所は、光源氏の姿を一目見ようと訪れた賀茂斎院の御禊の場でも、葵上の従者に恥ずかしめを受けていた。『葵上』では、生き霊となった六条御息所(シテ)の恨みが、こう語られている。

(地) われ人のため辛ければ われ人のため辛ければ  
必ず身にも報ふなり

なをを歎くぞ葛の葉の

うらみはさらに尽きすまじ

うらみはさらに尽きすまじ

この女のために、私はこんな辛い思いをしている。この恨みけつしてつきることはない。六条御息所の恨みの矛盾は、つれない光源氏ではなく、葵上に向けられているのである。

これとは対照的に、『鉄輪』では、鬼と化したの女(シテ)の恨みはこう謡われている。

(シテ)捨てられて

(地)捨てられて

思ふ思ひの 涙に沈み

人を恨み

(シテ)夫を託ち

(地)ある時は恋しく

(シテ)または恨めしく

(地)起きても寝ても 忘れぬ思ひの

因果は今ぞ しらゆきの消えなん

命は今宵ぞ 痛はしや

あるときは恋しく、あるときは恨めしく、忘れようとして忘れられない。そんなあなたの命も今宵まで。鬼と化した女は、その恨みの矛先を後妻うぶごではなく、心変わりした男に向けているのである。

『葵上』は、世阿弥の『申楽談儀』に近江猿樂の犬王所演の記事が見えるから、遅くとも犬王の没年である応永

二十年（一四一三）以前には成立していたことがわかる。一方、『鉄輪』が記録に登場するのは、それから七十年以上も後、『親長卿記』長享二年（一四八八）二月二十三日に見える内裏での「手猿楽」（素人による演能）が初見である。

王朝的な『葵上』と好対照をなす『鉄輪』は、なぜ誕生したのか。本稿では、これを中国演劇の草創期に登場した「負心」演劇と、内裏での「手猿楽」を行った町衆という二つの視点から考えてみたい。

## 一、中国伝統演劇の誕生と「負心」演劇

中国の伝統演劇は、宋代に急速な発展を遂げた。そして、その最初のヒット作となったのが、「負心」をテーマとする一連の作品である。

「負心」とは、人の恩義に背くことをいう。ところが宋代以降になると、この言葉はもっぱら「痴心女子負心漢（ひたむきな愛情を捧げる女と、それを裏切る男）」というテーマの中で使われるようになる。

もちろん男尊女卑と評される中国社会にあっても、こうした裏切りが肯定されたわけではない。たとえば、『後漢書』にはこんな話がある。

後漢の光武帝には、幼い頃苦勞をともした湖陽公主という姉がいた。光武帝は寡婦であった姉に新たな伴侶を迎えようと、姉と臣下たちについて語りながら、意中の人を探った。姉が「宋弘は容貌人徳ともに優れ、臣下の中で並ぶものがいまません」と言うと、光武帝は姉を屏風の陰に隠し、宋弘を呼んで言った。「諺に『身分が高くなれば友を換え、富を得れば妻を換える（貴易交、富易妻）』というが、これは人情の常ではないか」とすると宋弘は言った「私は『貧しいときの友を忘れてはいけない、苦勞をともした妻を捨ててはいけない（貧賤之知不

可忘、糟糠之妻不下堂」と聞いております」それを聞いた光武帝は、姉に向かった言った。「どうもダメなようですね<sup>1</sup>」

日本でもよく知られた「糟糠の妻」の故事である。とはいえ、誰もが宋弘のような誠実な心を持っていたわけではない。後世、とくに科挙制度が広く普及した宋代になると、「富を得れば妻を換える」がまさに「人情の常」となっていました。

科挙制度は、栄達への門戸を万人に開いたという意味で画期的な制度であったが、一つ大きな問題があった。それは受験資格が事実上、男性のみに限られていたことである。

女性の受験を禁じる規則があったわけではない。実際、宋代には科挙を受験した女性もいた。南宋の淳熙元年（一一七四）には、数え歳九歳の林幼玉という少女が童子科を受験し、みごとに合格している。嘉定五年（一一二二）にも、数え歳八歳の吳志端という少女が童子科で優秀な成績を収めている。しかし林幼玉には孺人という形ばかりの封号が与えられただけだった。<sup>2</sup> 吳志端も合格者を決める覆試の前に、役人の反対によって受験資格を奪われている。<sup>3</sup> 科挙にも男尊女卑というガラスの天井があったのである。

男女の不平等は、科挙だけではない。女性は経済的にも不利な立場に置かれていた。宋代の法によれば、父母が亡くなった時、女子の相続分は男子の半分と定められていた。しかも相続権を有するのは、未婚または離婚して実家にいる女子だけ。これではよほどの資産家の娘でもないかぎり、独り立ちすることは難しかったであろう。

こうした中、女性の中には自らの夢を一人の男に託す者もいた。男が科挙に合格できるよう物心両面から支えたのである。ところが男の中には、ひとたび科挙に合格するや、それまで自分を支えてくれた女性を捨て、良家の婿に収

まっつてしまふ不屈き者もいた。なかには後腐れのないよう、女性を騙して殺してしまう者までいたという。<sup>4</sup> 恩を仇で還す男を「負心漢」と呼ぶが、宋代、その代表として知られていたのが王魁である。

王魁は実在の人物で、本名は王俊民、萊州掖県(現山東省萊州市)の人である。「魁」というのは名前ではなく、科挙の状元(首席合格者)を指す言葉で、この言葉のとおり、彼は嘉祐六年(一〇六一)、二十五歳の若さで状元となっている。ところが、その二年後、南京で試験官をしていたとき突如発狂し、その後まもなく亡くなってしまったのである。この若きエリート<sup>5</sup>の死は、人々の間にさまざまな憶測を呼んだ。その一つにこんな噂があったという。

王魁は郷里で一人の妓女と深い関係になり、科挙に合格したら結婚すると約束していた。ところがいざ科挙に合格し、状元になると、他家の娘と結婚してしまった。それを知った妓女は、怒り恨んで自殺した。王魁はこの妓女の悪霊に苦しめられ、若くしてこの世を去った。<sup>5</sup>

もちろん、これはただの噂に過ぎない。王の死から三十年余り過ぎた紹聖元年(一九四)、医官の初虞世は「王状元任先生文大夫服碧霞丹致死状<sup>6</sup>」という一文を著し、王の死因が妓女の崇りなどではなく、金虎碧霞丹という薬の害であることを明らかにした。この一文は元来、金虎碧霞丹の濫用を戒めるために書かれたものだが、初虞世は王の不名誉な噂を打ち消すために、王が亡くなる前後のようすを詳しく記している。

発端は、南京の貢院(科挙の試験会場)での王の異様な行動にあったという。

状元王俊民、字は康侯、南京応天府へ発解官(科挙の臨時試験官)として派遣されたとき、貢院で精神病を発症

した。侍史(書記官)によれば、王は一つの石碑に向かって叫び続け、まるで石碑の中で誰かが答えているか、王を怒らせているかのようだった。症状が酷くなると、文書の間から鉄を取り出し、自らを一寸ばかりも傷つけた。しかし左右の者が止めたため、大事には至らなかった。貢院を出ると、まもなく症状も治まり、回復した。

初虞世は王と同郷で、幼いころから机を並べ、嘉祐年間にはともに科挙を受験した仲であったという。知らせを聞いた初虞世は、急いで王のもとに駆け付け、ふさいでいる王を元気づけようと、八方手を尽くした。ところがその歳の暮れ、初虞世が家に戻っている間に、地元の医者が王に金虎碧霞丹を処方してしまった。そのために病状は悪化し、ついに亡くなったという。

舒州に赴任していた王の父親は、息子の不慮の死の原因を探ろうと、任地から一人の道士と王の弟を家に送った。舒州太湖県の知事であった康侯の父は、「この道士は天に上奏して、鬼神冥界のことを訊ねることができる」と、舒州から一人の道士と弟の覚民を送った。道士は祈祷を行い、御符を書くと、冥界の言葉を伝えていった。「五十年前に謝、呉、劉を殺した。それがいままも未解決のままなのだ」

道士が冥界から伝えた言葉によれば、王の不慮の死は、彼が五十年前に謝、呉、劉の三氏を殺害したことの報いだという。初虞世は「王は二十七歳で亡くなったのに、五十年前の報いとは何なのか」と抗議しているが、この言葉は王の死に良からぬ噂を生む発端となった。

同じ年、長州県の知事夏璽かがくが罷免される事件が起こった。官職にありながら、民への高利貸しを行ったというのが

理由である。<sup>7</sup> 夏璽は嘉祐二年（一〇五七）の制科（皇帝が臨時に実施する官吏登用試験）に合格し、光祿寺丞を授けられたエリート官僚であった。その罷免はそれ自身が大事件であったが、彼が失脚すると、その名を騙って『王魁傳』という本を売り出す者が現れた。初虞世によれば、その内容はまったくのたaramだだったというが、エリート官僚の名をかたって書かれたこの本は、王の死の噂をさらに広めることになった。

それから百年後、永嘉（現在の浙江省温州市）で南戯と呼ばれる演劇が誕生した。この中国草創期の演劇で一大ヒット作となったのが、南戯『王魁』である。<sup>8</sup>

残念ながら、『王魁伝』も南戯『王魁』もいまは伝わっていないが、宋末元初の羅燁が著した『醉翁談録』に「王魁負心桂英死報」という一篇がある。これは宋代の講釈の種本だったらしく、当時語られていた『王魁』の物語が詳しく描かれている。その内容はおよそ次のようなものである。

王魁の魁は本名ではない。名のある官員の子息であったため、その名は書かない。魁はその学問・品行で知られていたが、科挙の試験で忌諱に触れ、落第してしまった。失意の中、魁は山東の萊州に旅し、そこで桂英という二十歳すぎの美しい女性に出会った。桂英は妓女であった。魁は、桂英の支援の下、学業に励んだ。翌年、都で試験が行われることになった。魁が都への旅費を無心すると、桂英は蓄えの半分を魁に与えた。魁は「たとえ富貴の身になっても、けっしてあなたを裏切りはしない」と誓った。出発の日が近づいたとき、魁は桂英に誘われ、海神祠に行った。魁は海神に誓っていった。「私と桂英は互いに愛し合い、けっして裏切ることはありません。もし生きて別れるようなことがあれば、天罰をお下しくください。天罰が下らぬなら、海神様は靈験ある神ではなく、愚かな幽鬼です」桂英は「あなたのお心がよくわかりました」と喜び、髪を解くと、乙女の鬢に結い直



した。さらに二人は小刀で腕から血を出すと、御神酒に混ぜて飲み交わした。

翌日、魁は都へ向かった。都に着くと、試験を受け、みごと状元となった。すると魁は心の中で思った。科挙でこれほどの成績を収め、立身出世が目の前だというのに、妓女などと関係を持ってしまった。家には厳しい父がいるから、彼女を受け入れるはずがない。そこで試験の後、桂英との連絡を絶ってしまった。

一方、合格の知らせを聞いた桂英は、使用人に祝いの手紙を届けさせた。手紙には詩が添えられ、魁を待つ思いが切々と謳われていた。魁は桂英の手紙に涙したが、父が決めた崔家との縁談を断ることはできなかった。

その後、魁は徐州の判官に任命された。魁が徐州に赴任することを知った桂英は「徐州はここから遠くない。きつと迎えの人を寄越してくれるはず」と喜び、再び使用人に手紙を届けさせた。使用人が徐州の役所を訪ね、魁に桂英の言葉を伝えると、魁は激怒し、使用人を殴って手紙を捨ててしまった。桂英はそれを聞くと、地に伏して泣き、侍女とともに海神祠に行くと、神に祈っていった。「初めてお参りに来たとき、私は魁と誓いを立てました。しかし、魁が誓いを破ったことは、神様もご存知でしょう。霊験あるならば、どうか天の裁きをお下しください。私も死んで神様をお助け致します」こうして家に帰ると、剃刀で首を斬って死んだ。

数日後、屏風の陰から突然、桂英が姿を現した。桂英は侍女にいった。「いまようやく魁への恨みを晴らすことができる。神様が兵を与えてくださったのだ」。侍女が見ると、桂英は大きな馬に跨り、手には剣を持ち、数十人の兵を従えて、西に向かつて行った。

侍女が魁の家を訪ねると、家の人は、桂英が剣を手に、全身血だらけの姿で天から降りてきたという。そして「他の者に恨みはない。私が欲しいのは裏切り者の王魁だけだ」というので、ある者が「魁さまはいま南京で試験官をしております」と答えると、姿を消したという。

魁が深夜、貢院の中で試験の採点をしていると、一人の人が空から降りてきた。見ると桂英である。桂英は髪を振り乱し、剣を手に叫んだ。「王魁、この裏切り者！探しにさがしたぞ。見つからぬと思つたら、こんなところにしたか」魁は言い訳のしようもなく、「私が悪かった。坊さん呼んで読経をさせ、紙銭もたくさん焼くから、どうか許してくれ」というと、桂英は「私が欲しいのはお前の命だけ。読経も紙銭も無用だ」といった。周囲の者には、声は聞こえるが姿は見えない。すると魁は突然鋏で自らを刺した。周囲の者が止めたので、大事には至らなかつたが、徐州に送り返されると、ふたたび刀で自らを刺した。母のおかげで一命は取り止めたものの、魁は生きる意欲をすっかり失つていた。徐州に夢占いをする馬守素という道士がいた。魁の母がこの道士に祈祷をさせると、夢で魁と一人の婦人が髪を繋いで役所の中にいるのが見えた。道士は魁の母に「もはや魁殿を救うことはできません」といった。その数日後、魁は自らを刺して死んだ。

これは講釈の種本だったらしいが、南戯『王魁』も恐らくはこのような物語だったのだろう。モデルとなった王俊民にしてみれば、とんだ冤罪をかけられたわけだが、当時はこうした「負心」芝居が大ヒットしたらしく、宋代の南戯として知られる五種の作品の中、なんと三種が「負心漢」を描いたものであった。

では、なぜこうした芝居がヒットしたのだろうか。その理由の一つは、中国の伝統演劇の主要な舞台が寺廟の祭礼などで上演される村芝居であり、それを最も楽しみにしていたのが女性だったからである。時代は下るが、清代の台湾の地方志『諸羅県志』には、女性たちが村芝居に集まるようすが次のように描かれている。

芝居は昼夜を問わず行われ、付近の村からは女性たちが三々五々車に乗ってやってくる。数人が車の中に坐つ

て舞台を取り囲む。数十里も離れたところから来る者もいる。着飾りもせず、車にも乗らず、夫や親に連れられてやって来るのである。<sup>10</sup>

飲む、打つ、買うと楽しみが多い男性とは異なり、女性たちにとって村芝居は数少ない娯楽の場だった。平凡な日常から離れ、空想の世界に遊ぶことができる村芝居。それがいかに女性の心に響くものであったかは、当時芝居が引き起こしたいくつかの事件からも窺うことができる。たとえば、南宋末の咸淳四〜五年（一二六八〜六九）、都では黄可道が書いた南戯『王煥』が大流行した。これは王煥という若者が、愛する名妓・賀憐憐と結ばれるため、軍に身を投じ、戦功を挙げて、悪徳將軍の妾となっていた賀憐憐を救い出すという波乱万丈のロマンスであった。この芝居は同じ境遇にあった女性たちの心を動かし、役人の妾たちが集団で逃げ出すという事件も起きている。<sup>11</sup>一方、不実な男の末路に留飲を下げることができたのが「負心」芝居だった。南戯の『趙貞女』や『王魁』が永嘉（温州）で誕生したのは、南宋の光宗の時代（在位一一九〇〜九四年）だが、<sup>12</sup>光宗の従兄弟である趙閔夫は、これらの芝居を禁じる御触書まで出したという。<sup>13</sup>「負心漢」への復讐劇が宋王朝の宗室をも動かす一大センセーションを巻き起こしたのである。

## 二、『鉄輪』と町衆

話を『鉄輪』に戻そう。わが国の「負心」芝居ともいうべき『鉄輪』には、二つの興味深い特徴がある。

一つは、記録上の初見が内裏での「手猿楽」であることである。

室町時代、内裏での猿楽の上演にはかなりの抵抗があった。たとえば、応永三十四年（一四二七）、摂津の榎並座が内裏で猿楽を行った際には、「昔より禁中においての猿楽、その例、更に以てあるべからず。（中略）諸人、眉を擡め、

閉口するばかりなり<sup>14</sup>と、厳しい非難の声が上がった。そこで、翌正長元年（一四二八）、内侍所で神籤みくじが行われ、内裏での猿樂は禁止されてしまった。

禁止されたとはいえ、天皇や女御たちも猿樂は見たい。このジレンマを解決する口実となったのが、素人による「手猿樂」であった。内裏での猿樂が禁止されたのは、それが賤業の一つと見做されていたからであり、素人がやる分には問題ないと考えたのである<sup>15</sup>。

文明十三年（一四八一）、内裏で応仁の乱後初めての猿樂が行われた。これを主催したのも下京三条の医師・竹田法印昭慶らの手猿樂だった<sup>16</sup>。当時、京都は二条大路を境として、上京と下京の二つの町に分かれていた。内裏や幕府のある上京は、応仁の乱で焼け野原となっていたが、商工業者などの町衆が暮らす下京は、比較的被害が少なかった。この下京の町衆が、内裏での猿樂を復活させたのである。

長享二年（一四八八）、内裏で『鉄輪』が上演された。『鉄輪』の記録上の初見だが、これを行ったのも亀大夫という手猿樂であった。亀大夫の出自や身分は明らかでないが、「七条亀大夫」とも呼ばれおり、下京七条の住人であったことがわかる<sup>17</sup>。

『鉄輪』の女の夫、すなわち「本妻をば離別仕り、新しき妻を語らひて候ふ」という男も「下京辺に住居仕る者」となっている。

このように『鉄輪』は、下京の町衆によっていち早く舞台にかけられただけでなく、その内容も、皇族や公家の世界を描いた『葵上』とは対照的に、京都の下町で起こった世話物的な事件が描かれているのである。

もう一つの興味深い点は、町衆の信仰とされる法華信仰の影響が窺えることである。

『鉄輪』の前場の舞台は、法華経の守護神である三十番神の一つの貴船神社であり、後場で鬼と化した女を退散さ

せたのも三十番神である。女が御幣の中の三十番神に恐れおののく姿を、地謡はこう謡っている。

(地) ことさら恨めしき

あだし男を取って行かんと 臥したる枕に立ち寄り見れば

恐ろしや御幣に 三十番神ましまして

魍魎鬼神は穢らはしや 出でよ出でよと 責め給ふぞや

腹立ちや思ふ夫をば 取らで剩さへ神々の

責めを蒙る悪鬼の神通

三十番神とは、一ヶ月三十日の間、毎日輪番で仏法を守る日本の神々をいう。もとは天台宗が神仏習合思想に基づいて仏教の守護神としたものだが、永仁二年(一二九四)、日蓮の弟子の日像が京都での布教を始めたとき、これを法華経の守護神とした。神祇信仰の篤い京都の人々に、日蓮の教えを広めるためである。日像の布教によって法華信仰が広まると、各地の寺には三十番神を祀る番神堂(番神社)が建立され、現世利益を求める町衆たちの信仰を集めた。<sup>18)</sup>

前述の竹田法印昭慶には、もう一つの名前がある。『善界』の作者として知られる竹田法印定盛である。『善界』は、大唐の天狗の首領・善界坊が、日本の仏法を妨げようと、愛宕山の天狗・太郎坊と謀って比叡山を狙うが、飯室の僧正(ワキ)の祈祷によって現れた神々に責められ、退散するという話である。神々が登場するようすを、善界坊(シテ)と地謡はこう謡っている。

(地) その時御声の 下よりも その時御声の 下よりも

明王現はれ 出で給へば 矜迦羅制多迦 十二天

おのおの降魔の力を合はせて 御先を払つて おはします

(シテ) 明王諸天は さて置きぬ

(地) 明王諸天は さて置きぬ 東風吹く風に 東を見れば

(シテ) 山王権現

(地) 南に男山

(シテ) 西に松の尾

(地) 北野や賀茂の 山風神風

「明王」とは「不動明王」、「矜迦羅」こんがら「制多迦」せいたかは不動明王の左右に侍する二童子、「十二天」は天上界に住む十二の神々、いずれも仏法の守護神として知られるインドの神々である。一方、これら異国の神々を「さて置きぬ」として、日本の神々が颯爽と登場する。京都の東にある「山王権現」(日吉大社)、南にある「男山」(石清水八幡宮)、西にある「松の尾」(松尾大社)、北にある「北野」「賀茂」(北野天満宮と上賀茂・下賀茂神社)、いずれも京の町を四方から守る三十番神である。

このように、下京の町衆の一人であった竹田法印定盛は、『善界』の詞章の中にも法華信仰の守護神を忍ばせているのである。

### 三、『鉄輪』はなぜ誕生したのか

それでは、『鉄輪』はなぜ誕生したのだろうか。長尾一雄氏は、その理由を次のように説明している。<sup>19</sup>

「剣の巻」の顕著な説話のひとつである鉄輪のものがたりは、嫉妬の激しさにおいても、そのあつかわれ方においても、またおそらく有名な程度においても「葵上」に匹敵するものでありながら、著しく非王朝的且つ行動的なこと、謡曲製作年代の一般の人心と「葵上」に比してより近く訴え得る要素を持っていた。このことに着目した謡曲作者は、「葵上」の世界に対する一種の世話物的な位置をこの説話に発見して、その世界を世話物として完成しようと志したのであろう。

長尾氏によれば、『鉄輪』が誕生したのは、この曲の素材となった「剣の巻」の鉄輪の物語に「一般の人心」に訴える世話物的な要素があったからだという。この「一般の人心」とは、より具体的には「中世の庶民女性たちの心」と言い換えることができる。

女性が社会の弱者に陥りやすいことは、いまもむかしも変わらない。たとえば、九世紀に景戒が著した『日本霊異記』には、貧しさに苦しむ者の話が九話取められているが、そのうちの八話が女性の話である。男女の格差が比較的小なかつた古代でさえこうなのだから、嫁入婚・夫方居住が一般化し、格差が広がりつつあつた中世ともなれば、男の心変わりによる離婚など到底容認できることではなかつた。ところが中世の法は不平等で、既婚女性の密懐(婚外性関係)はいかなる場合も厳罰の対象となつたが、既婚男性は人妻を相手としないかぎり処罰されることはなかつた。こうして日本でも、王魁のような「負心漢」、『鉄輪』でいうところの「二道かくるあだ人」への復讐劇が誕生したのである。中世の女性、とくに庶民の女性にとっては、『葵上』のような「後妻打ち」よりも、『鉄輪』のような復讐劇のほうが、より心に響くものがあつたのである。

こうした点からみると、『鉄輪』の記録上の初見が下京の町衆による「手猿楽」であること、そこに登場する人物

が「下京辺に住居仕る者」であること、鬼と化した女を退散させたのが町衆の信仰する「三十番神」であること、これらはいずれも偶然ではなかったのかもしれない。古代から中世へとという大きな社会変化の中で、中国の庶民女性たちが南戯『王魁』などの「負心」芝居を最初のヒット作としたように、日本でも京都の下町に暮らす庶民女性たちが『鉄輪』の誕生を後押ししたのではないだろうか。

『鉄輪』と中国の「負心」芝居との関係は明らかでないが、興味深いのは内裏で手猿楽を行った者の中にも、中国にルーツを持つものがあることである。

『善界』の作者・竹田法印定盛の祖父・竹田昌慶は、応安二年（一三六九）、建国したばかりの明に渡り、金翁道士に就いて医学を学んだ。その間、道士の娘を妻に迎え、永和四年（一三七八）、帰国した。昌慶夫婦の間には、直慶と善慶という二人の子が生まれ、定盛はこの善慶の子、すなわち日本人の祖父と中国人の祖母を持つクウォーターである。<sup>22</sup> ちなみに祖父の昌慶は、在明中、太祖の後の難産を救い、安国公に封ぜられたと伝えられている。明の太祖といえば、『琵琶記』が大のお気に入り、「四書五経は、木綿や豆、雑穀と同じで、どの家にもあるものだが、高明の『琵琶記』は、山海の珍珠と同じで、富貴の家には無くてはならないものだ」と、毎日のように上演させていたという。<sup>23</sup> 『琵琶記』は、宋代の「負心」芝居の一つである南戯『趙貞女』を、元末明初の高明がハッピーエンドに改作したものである。もし昌慶の話が本当だとすれば、『琵琶記』を見る機会もあっただろう。定盛が生まれたとき（応永二十八年（一四二二）生）、祖父の昌慶はすでに亡くなっていたが（康暦二年（一三八〇）没）、父・善慶などから祖父の話聞く機会もあったのではないだろうか。

もう一人、文明十四年（一四八二）、内裏で手猿楽を上演した饅頭屋「塩瀬」の一族も中国人の末裔である。「塩瀬」の祖・林浄因は浙江の人で、元の至正元年（一三四一）、入元僧・龍山徳見禪師に随侍して日本に渡り、奈良で饅頭屋



を開いた。禪師が亡くなると、淨因は帰国したが、日本人の妻と子どもたちは饅頭屋の家業を続けた。長祿四年（一四六〇）、五代孫の惟天盛祐が京都に店を開き、この京都の店は後に北家と南家に分かれた。応仁の乱の際、京都北家は三河国設楽郡塩瀬（愛知県新城市）に一時疎開し、それ以降「塩瀬」の屋号を名乗るようになったという。<sup>24</sup>

『鉄輪』を演じた下京の町衆にとって、中国は意外に身近な存在だったのかもしれない。

## 〔注〕

- 1 (南朝宋) 范曄『後漢書』 宋弘傳
- 2 (清) 徐松『宋會要輯稿』 選舉九之三〇孝宗乾道九年六月二十七日
- 3 (清) 徐松『宋會要輯稿』 選舉一二之三九童子科孝宗嘉定五年四月十一日
- 4 (宋) 江少虞『事實類苑』 卷第七十楊孜。
- 5 (宋) 張師正『括異志』 卷三王廷評
- 6 (宋) 初虞世「王状元任先生碧霞丹致死状」(『古今録驗養生必用方』所収)。この一文は、(宋)周密『齊東野語』 卷六 王魁 伝の中にも引用されているが、近年、南京図書館に清の同治二年(一八六三)に葉廷瑄が抄写した『古今録驗養生必用方』の写本があることが確認され、二〇一九年、影印本が中医古籍出版社から出版された。岡本不二明「『王魁』 関係資料」(岡山大学文学部紀要第三四号二〇〇〇年)
- 7 (宋) 李燾『續資治通鑑長編』 卷一九四仁宗 嘉祐六年
- 8 (明) 徐渭『南詞叙録』 叙文「南戲始於宋光宗朝、永嘉人所作『趙貞女』『王魁』二種実首之。」(明) 葉子奇『草木子』 卷四 之下「俳優戲文始於『王魁』、永嘉人作之。」
- 9 宋代の南戲としては、『趙貞女蔡二郎』、『王魁』、『王煥』、『樂昌分鏡』、『張協状元』の五種が知られるが、このうち『趙貞女蔡二郎』、『王魁』、『張協状元』の三種が「負心漢」を扱った作品である。

- 10 (清)陳夢林『諸羅県志』卷八 風俗志
- 11 (元)劉一清『錢塘遺事』卷六 戲文誨淫「至戊辰己巳間、『王煥』戲文盛行于都下。始自太学，有黃可道者為之。一倉官諸妾見之，至于群奔，遂以言去。」(「戊辰己巳」は、南宋度宗咸淳四年(一二六八)〜五年(一二六九))
- 12 (明)徐渭『南詞叙録』叙文「南戲始於宋光宗朝、永嘉人所作『趙貞女』『王魁』二種実首之。」
- 13 (明)祝允明『猥談』歌曲「南戲出於宣和之後、南渡之際、謂之温州雜劇。予見旧牒、其時有趙闕夫榜禁、頗述名目、如『趙貞女』、『蔡二郎』等、亦不甚多。」
- 14 『満濟准后日記』応永三十四年正月十二日条
- 15 五島邦治「文明年間の内裏手猿楽について」(『藝能史研究』第一一三号、一九九一年)
- 16 小林静雄「竹田法印定盛考」(『謡曲作者の研究』能楽書林、一九四二年)、大島壽子『医師と文芸―室町の医師竹田定盛』(和泉書院、二〇一三年)
- 17 能勢朝次『能楽源流考』第八章手猿楽考(口)非声聞師系の猿楽一亀大夫(西川大夫)
- 18 藤井学「町衆の信仰」(『講座日蓮』第三卷、春秋社、一九七二年)
- 19 長尾一雄「鉄輪考」(『藝文研究』第十二号、一九六一年)
- 20 三舟隆之「貧窮する女性たち―『日本靈異記』の説話から」(『駒沢史学』第九三号、二〇一九年)
- 21 総合女性史研究会編『史料にみる日本女性のあゆみ』(吉川弘文館、二〇〇〇年)五七頁
- 22 同注16
- 23 (明)徐渭『南詞叙録』叙文「時有以『琵琶記』進呈者。高皇笑曰『五經・四書、布帛・菽粟也、家家皆有。高明『琵琶記』如山珍・海錯、貴富家不可無。』既而曰『惜哉、以宮錦而制鞵也』由是日令優人進演。」
- 24 川島英子『まんじゅう屋繁盛記―塩瀬の六五〇年』(岩波書店、二〇〇六年)